

選門
號 970
卷 4

大屋

大屋
大屋
大屋

上
○ひのんの入船

小舟相屋来...
あそびや仕替もので
二本上様ふつで
うた之雨ふりまはし
のぞく

あ
かやがほいかな
金



明
三

六十二
六十二
六十二
八十六
八十三
八十一
八十一

六十二
六十二
六十二
八十三
八十一
八十一
八十一

大黒屋庄兵衛

六十二
六十二
六十二
八十二
八十二
八十二
八十二

四
イ

上

○お竹の汐た

とどのろ しま うちいで
田子浦の濱へにおおとく

見さぐひろいよのや

ううは、はながおてら

その中、富士のふが

はりさまよろこ

宝永山もあり

田子に大い



上

○結の目玉

おふさん私のあつものま

わづがらのくひひ〇つり

ま〜くしてまぬうら

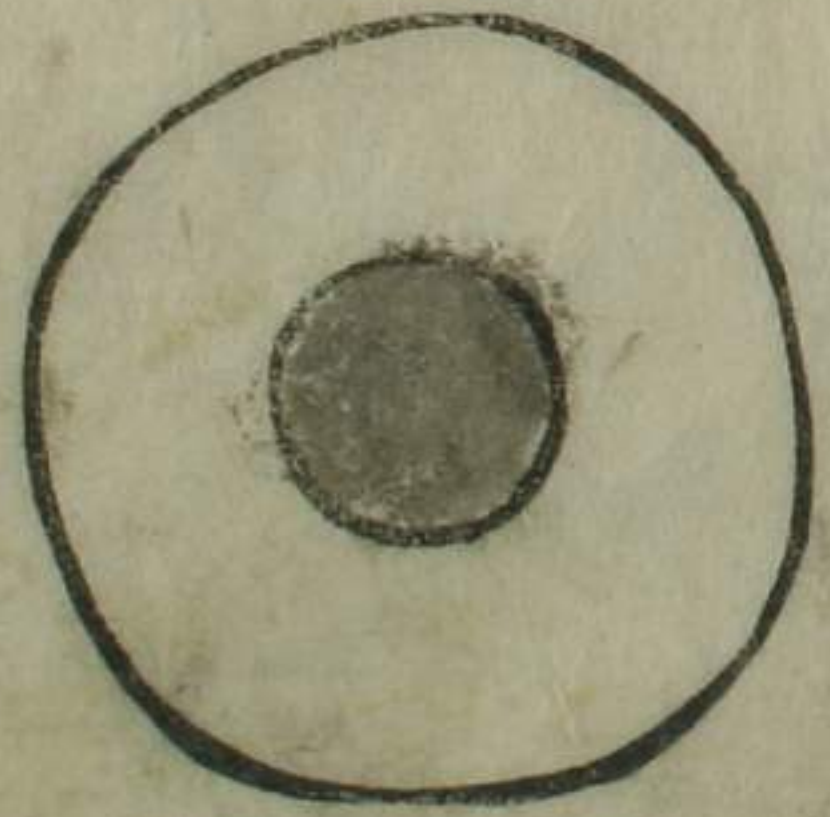
ごんぐ

うう大きうならま

先はうん

あま

あつくでわ



上

○ 弓矢の神話

任をへまのり下向みおはれと

まづすぐりいりよう

いやく 海原の御子

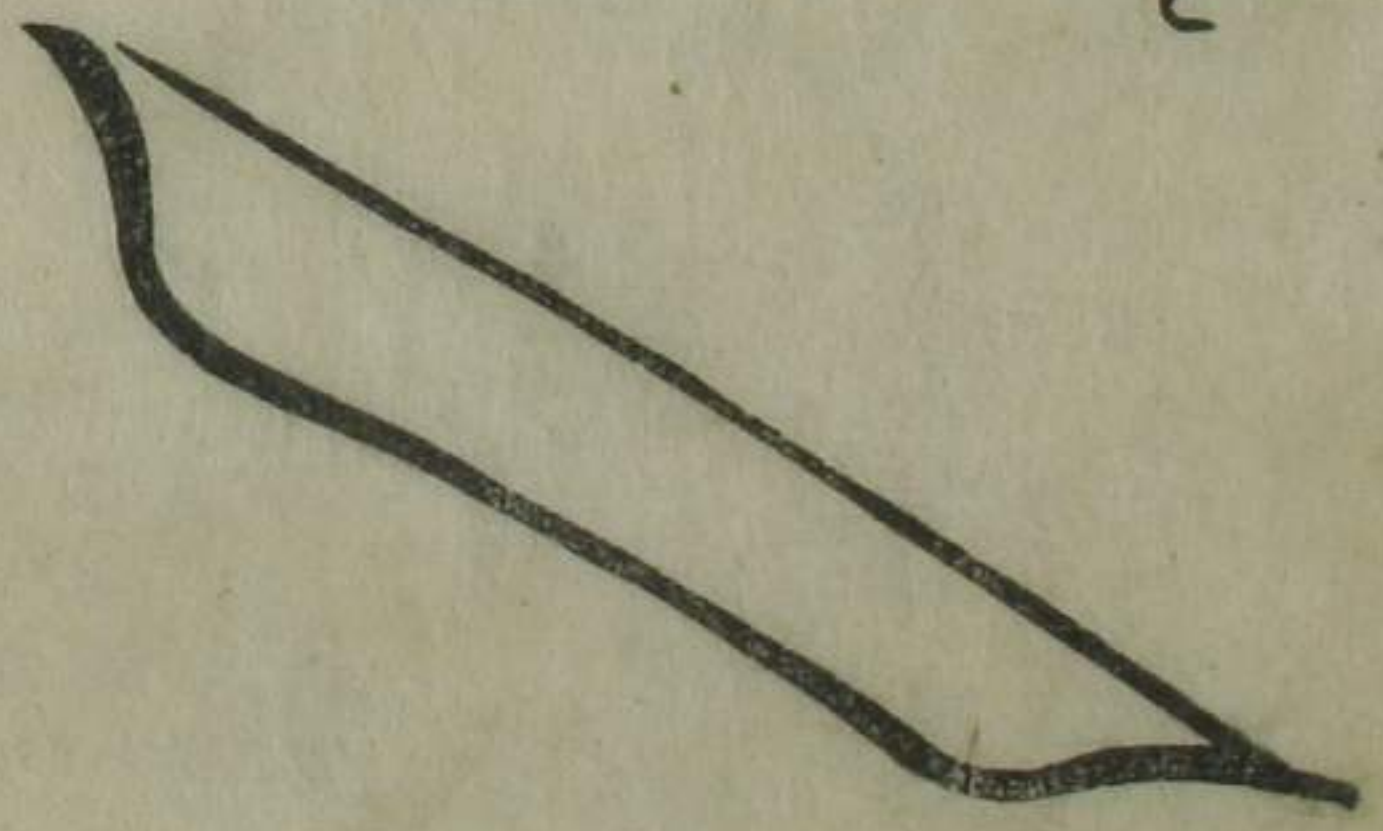
野

まづぐりまを又づでとも

大勢のやつら

かく口りこらじやるど

中乃を 矢をつるぬ



一唱 三歎 極上 ○ 長石の呪法

大勢の百姓がけやく義堂

竹やりで 法をよそ来と

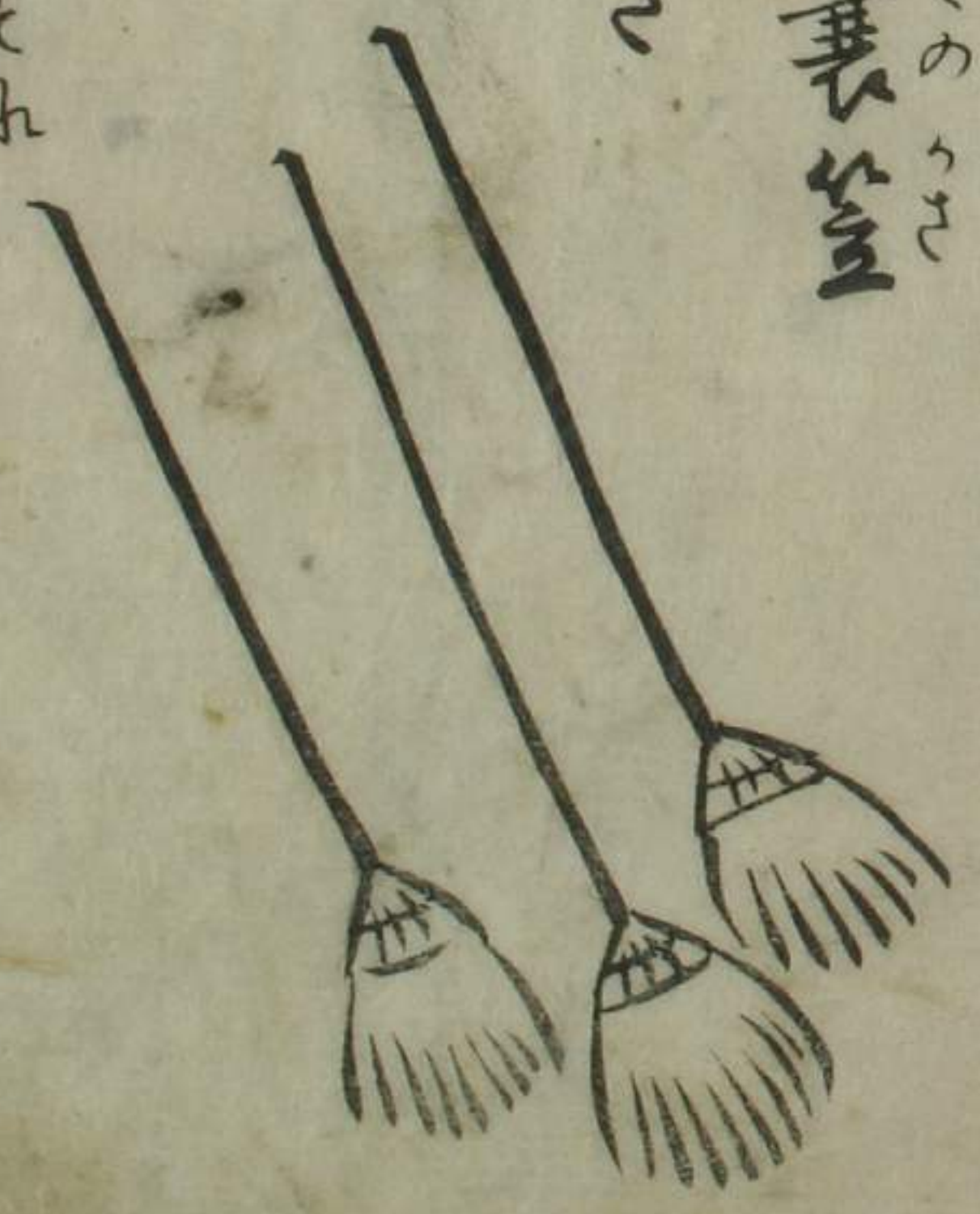
い 夫は 蜂起 ほうきで

あつといまづめらけ

あつといまづめらけ

あつといまづめらけ

あつといまづめらけ



上

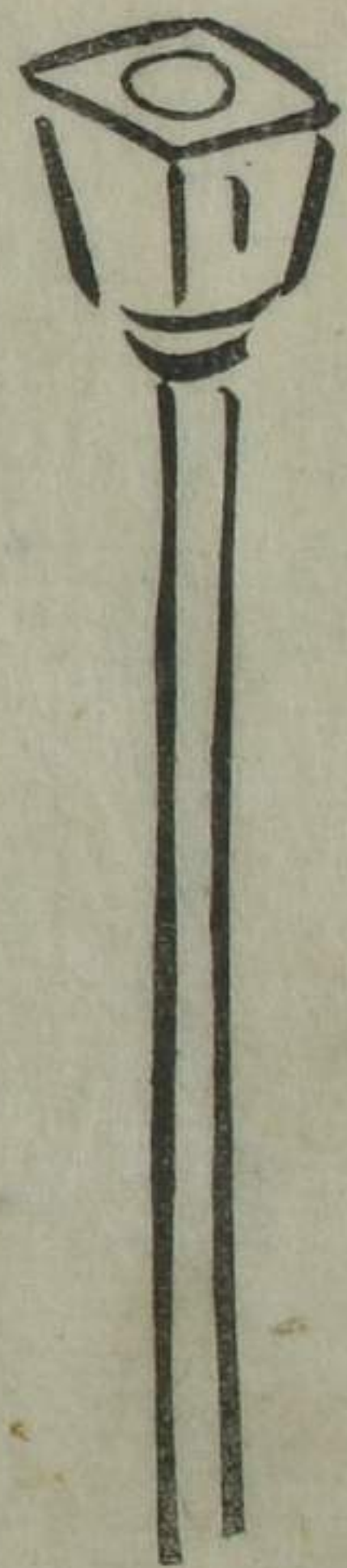
○ 弦の篋

堀後の丹戸大坂の佳友のりどや

とのさば
こみやうそ

トてはうら

洞此箇どや




とうてい

吹屋
吹矢
ふきやい

上
○ さあが 欵

親の欵とつけ糸うふおちハげぶ海

○ ふう編笠しはん糸袋をうけまもの

と
うらふ
裾まで

ひま
た手に
うらふ

の天八を持回ら

ま出る次め類と天蓋のすきうら

あらわとんつけ



上
○どちろも吸^すもの

おれ^{やうこざり}い多^とを粉^{こな}好^すで太^ふきな

奴^{やつこざり}強^{つよ}しりきせるあつ^{あつ}い^いぶ

久^くあ^あ来^きとつ^つき^きこ^こ志^しん

ち^ちづ^づや^やけ^けれ^れい^いめ

厚^{あつ}首^{くび}す^すい^い口^{くち}を^をあ^あん^んぶ^ぶ

え^えく^くく^くれ^れい^いぶ^ぶ

久^くれ^れば^ばい^いふ^ふう^うき^きん^んさ^さけ^けざ^ざら^らう^うし^しあ^あら^らう^う

田^いを^を粉^{こな}も^もい^いち^ちう^うご^ごと^とを^をあ^あん^んぶ^ぶや^やな^なあ^あ



と ○ふこのは^はい

いん

あ^あけ^けく^くく^くれ^れい^いこ^こ

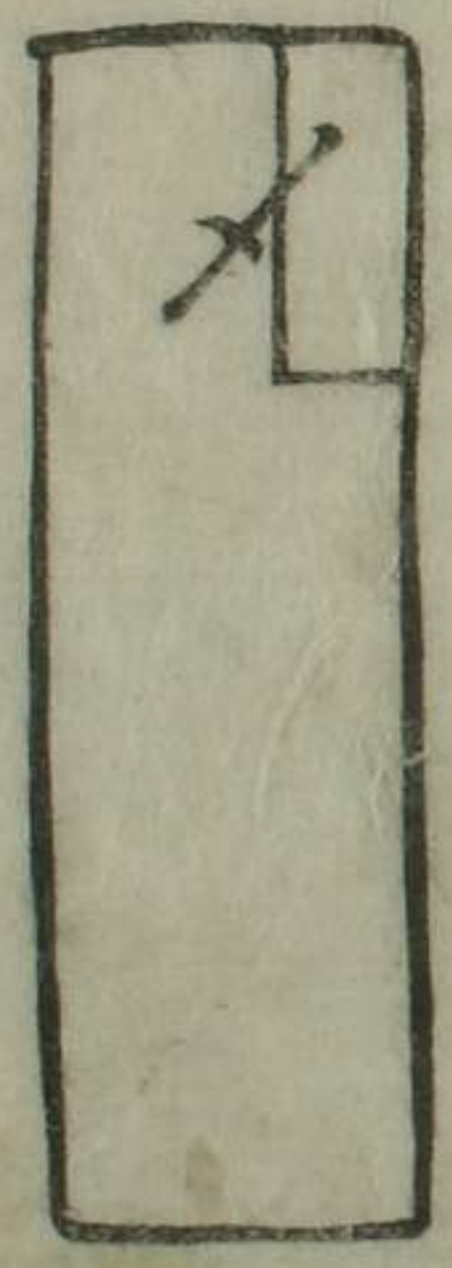
音^ねう^うく^くが

糸^{いと}つ^つ

あ^あら^らん

そのと^とづ^づい^いや

い^いち^ちう^うご^ごと^とを^をあ^あん^んぶ^ぶや^やな^なあ^あ

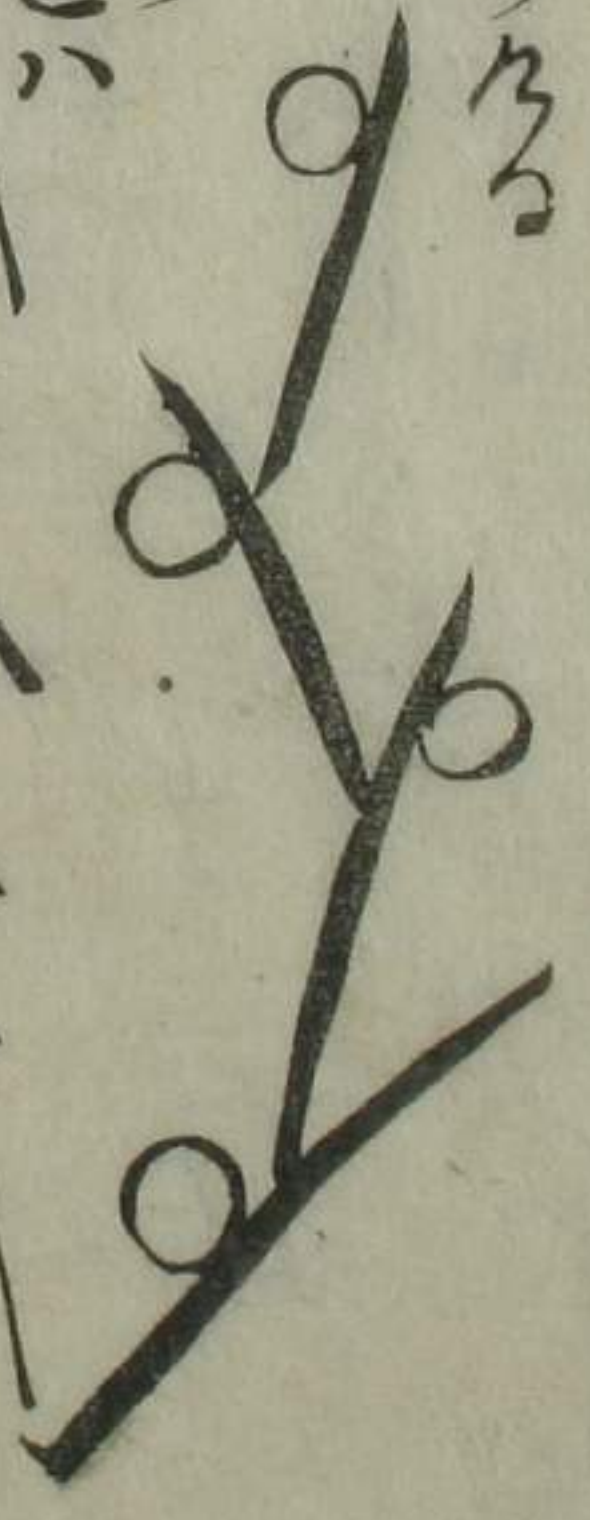


上 ○ 烟花の種まね

六頭一照射け大臺で下さし殊々
清かきびとた戴とりまき香け水が

やぶいし
それ〇九尺それ〇尺

それ〇それ〇とやりける
〇へす例の登子が



それ〇〇とやりける
それ〇〇とやりける
それ〇〇とやりける
それ〇〇とやりける
それ〇〇とやりける

○ 肉巻の義備

途方もない勢が固く思ふぬめり

尾とと
うらうらうらうらうらうらうらうら

あわうらうらうらうらうらうらうら

ときよの内よのやうな

花結がついそあつる



あわうらうらうらうらうらうら

あわうらうらうらうらうらうら

上
○あさぎよサ艾草

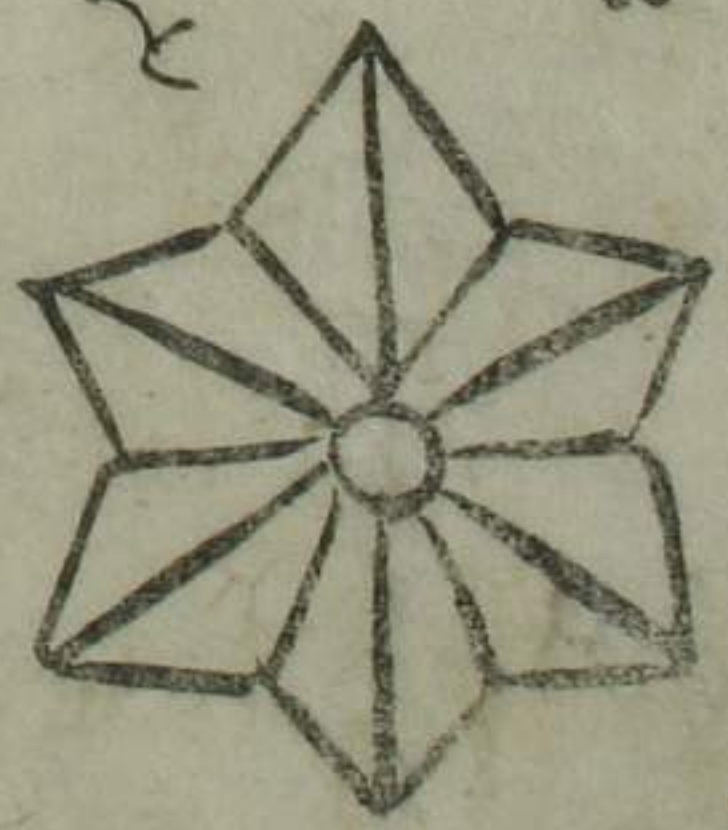
七人連しちえんづつきぎくく 弘波えん新地しんちのの 唱うろこ婦おやま

うんうんづづ 沼しほのの 中ちゆう 友ともをを 連ちゆうぐぐみみんん

づづれれままくく 出い来でるる 火ひふふいいちちちち

いいちちぢぢととららかかくく

一いたちししききをを 回まぐぐくく 角うろこをを



呼よんんどど 火ひ折ぎのの 車くるまをを ななままららああらら

ままかかへへるる 山やまににきききき 我わががふふけけてて

朝あさ方がた 麻あ形がた つつののああささぎぎよよろろららくく

上
○大唱おほなうた一いつ奏そう

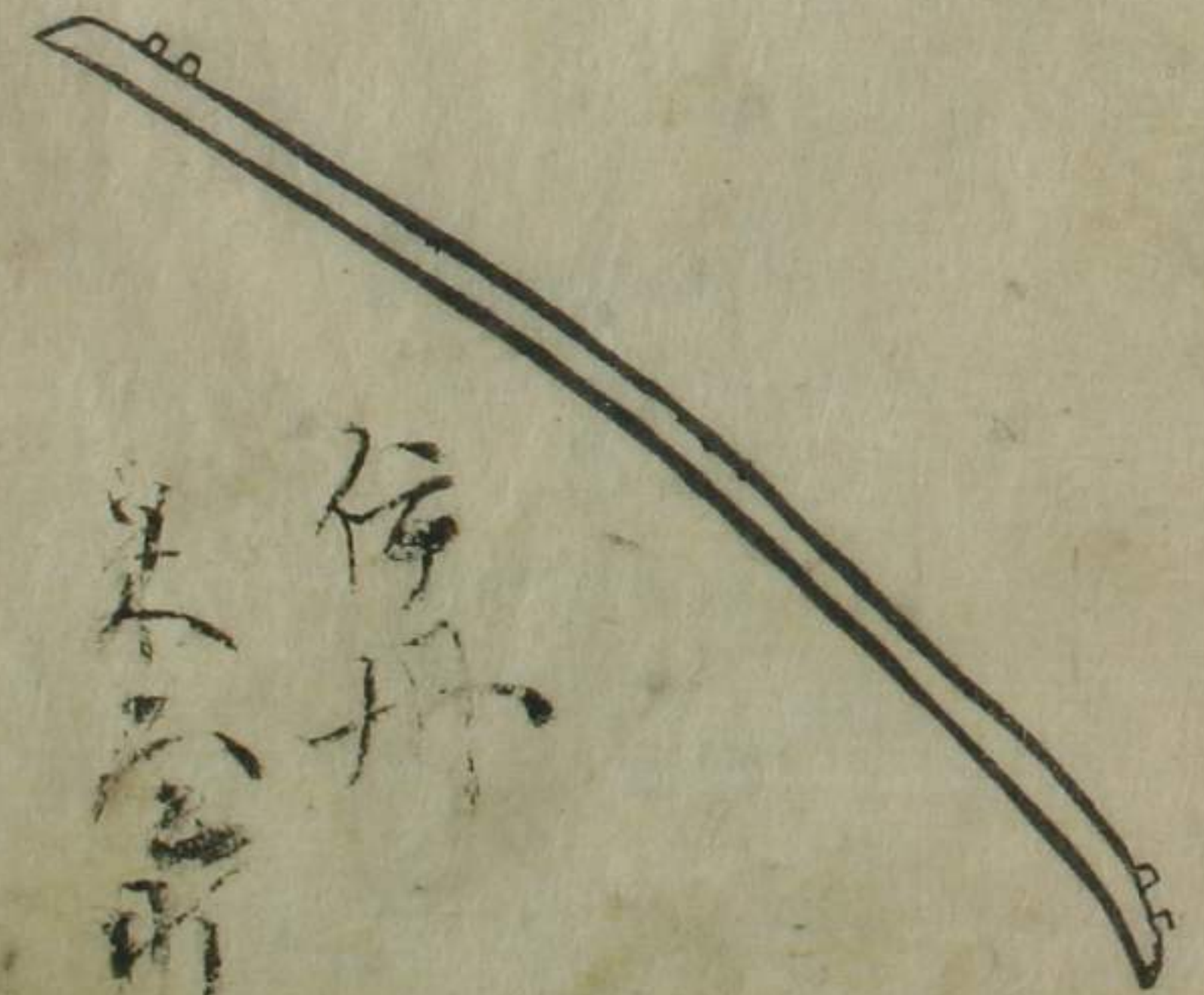
ややううままいい

梅うめややきき

ななががららとと

ししりりてて

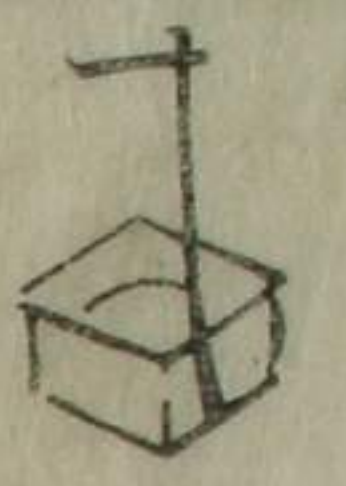
ななががららとと



倚より

米こめをを 所ところ

○白角のほし



↑ っうよな升の産下さうんざしと

ありりよ

↑ 棹も

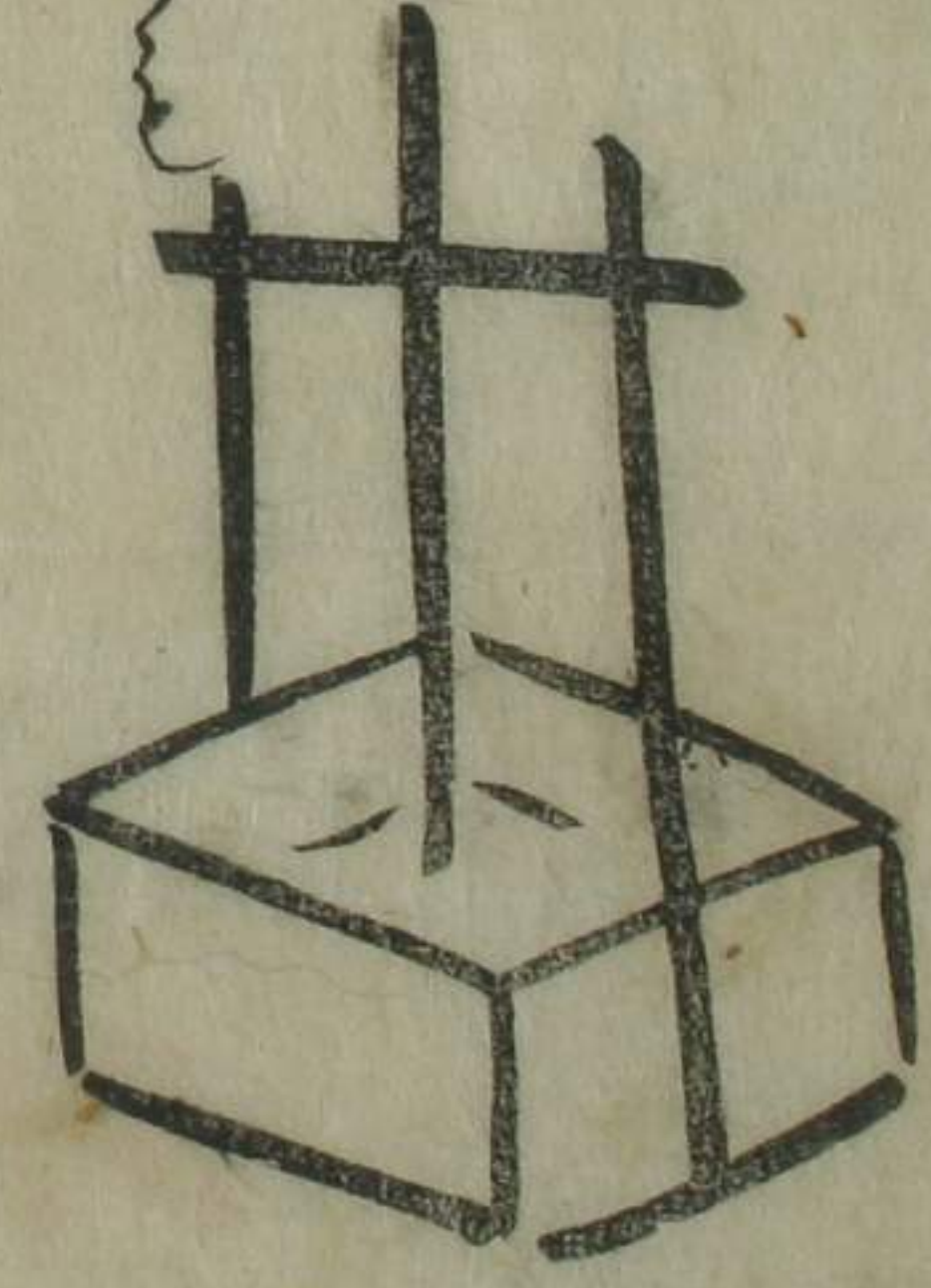
↑ 棹と、れ

↑ 十おくれ

↑ 烈い

↑ 烈い

↑ 烈い



上 ○男れま

中法の効十弁ハを極まらるるもの

↑ じやい

↑ 是く仕る

↑ 橋を

↑ ぞめて

↑ 之味

↑ 色

↑ 粹能

粹能



上へ ○ 雲井の字ト

冊 ちうりう字櫃の何る相おし

痛むが 雲井のお場、雲入りじや

しりばいやくおぢや

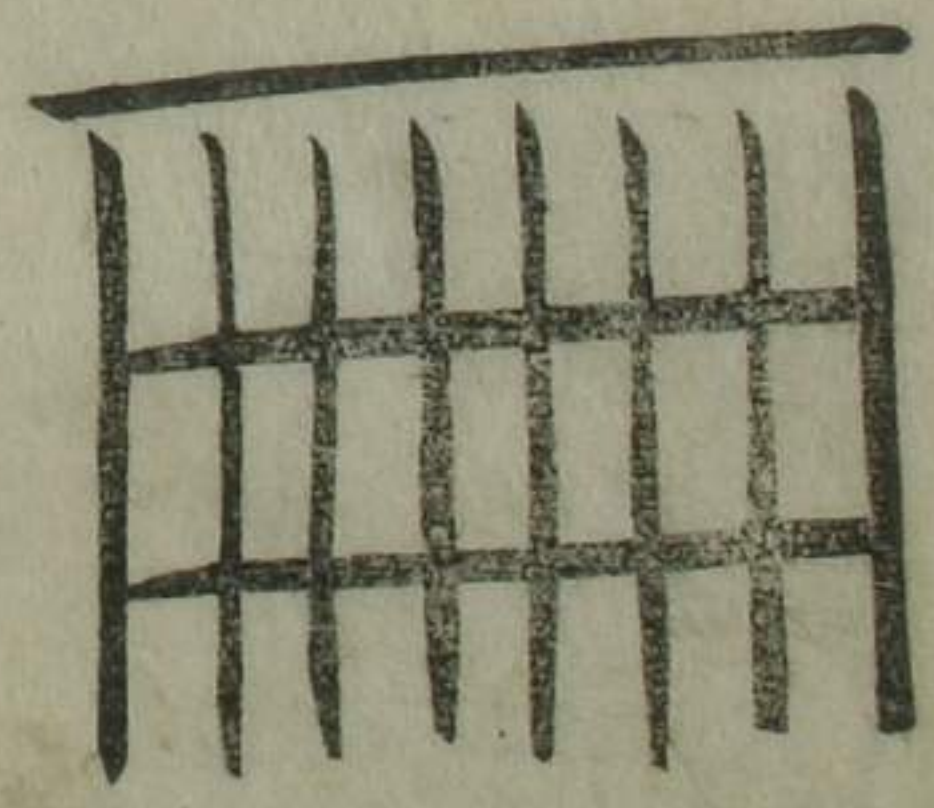
あふふとりまゝ居る取

○ ちうりう月がでる

志んくくすると

やあがの

それいんがのどうでもあはるや
あはるや



上へ ○ ちう物の赤法び

うりう古いおてと

ういまゝさかはんが

おれての糸

もんがういさる紙で

うの

しりばいやくおぢや

唐辛



上吉

○ 壬午の夜

屋敷の坊主がくぐりぬけ

はらふし志やきざり

目の丸やと異ひ

たけあしといふと

おもしろく立のぶ

やれは付あがりごと

あやころおるふきやちるやうな

かぬとてひささ いづつ けつる 風



あはれ

巻中透

○ おろごの後光

今夜ぬる條

おのやうな大判が

とつとが法持な

金しやげが同

ちんちん

そよそよ一あが

七あうとや



そよばやし 珍重 ひろくと灯籠ぶつても

くま 珍重 やくろ

上

○ 四角な舌

けあざ 舌の精

あき眼とむき

うら

とんなめと

あんな目と

そん 仙臺二文どや

前代まけ



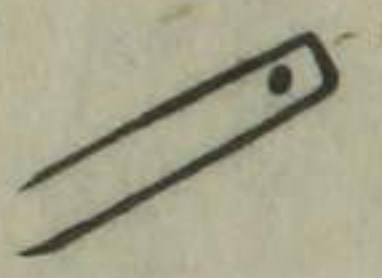
上

○ 針造の室本

あま 日本國の針

運の強弱は目あり

えつて又しる



うまな重屋の

ほふなし 揚子もの

運がむいて身てけを信中と

くろし ちつすく



上々
○ 獨り居の山住

女房もつるやいやくさるる
ささどぞ獨り山の者な
書しものおそしややはが

舟のつるやいやくさるる
ささどぞ獨り山の者な

おで
ささどぞ獨り山の者な



○ 流の湯を

今夜梅のよみ能おをる

お来と親をかあつ

あかろ
えんお

又そ次
まを次

うさよさか
まを次



うさよさか

流とつる
親せ流と

感吟上々吉

〇くろりの侍

出霊ろくそくと 賢く 林火く 極楽の

舟が 現る 親仁 大きく

うち 小ごん

くろくろく

子心



真切 志んきろく

と 〇次の長

や 夕ア

えな 鳥

追く

あふ

おもり

あふ



上

○ 八月の椿知恵

帳^{のがり}につける椿のうらふ

黒天絨

ひうらほ

うら^つつ^ん寝^がは^くい^が

けち^の紋^ハふつごうな

紋じや

寝^のなるややつらり申と三つ巻

庚申



上

○ 寝^のの文^を寝^和

けい^な枕^をきて文^を寝^和

侍^とク^ア新^地の^女が

月^無恋^うえん

うらやめ^じや^な

うらやめ^じや^な

うらやめ^じや^な

おし^とろい^も

ん
ん

よと ○心のまらぬ

かうげまのり 富やの契げきま
とまり移る小使しおきてんん
まろくろり 隅の方え何う
かそむひまろ白がまのが
すつろり 立とく居る
びつろり 志なろ
組伏んしひんぶろり

あんど
安堵



上 ○お巻おりの

中村梅玉ハハ十八才で一せ一代
又再勅
切きよぶやまの文七
四十八てまめき
いて

文七

浮世と探も二夜のつとせ
け後づく

上
○大預成就

私わたくし今いま夜よ小燈ことう天祚てんそんさ毎ま大だいひひ二に河が苦く学がくよ

教しゆが丁ていなな
十じゆ口くわうの清せい礼れいよ
老らう若わく燈とう翁うわうとと何なにももままん

可

弘くわうららもも一いつの得あやりりままややうううう
すすぐぐにに引ひくくののがが大だい一いつ三さんなりなり 菊きく丸まる

活物くわくぶつ動どう息いき法はふ法はふ為ゐ論ろん

四民 教訓
我身わがみ在あるる
初編三冊出来 此書は忠孝と云々
中編三冊出来 ちつひんといふこと
後編三冊近刻 身と心と云々
子孫繁栄は本意なり

諸國
年中行事 全部 六冊

女千字文繪抄 全 壹冊 近刻

天保三年壬辰初春發

二條通高倉西入南側

京都書林

田中屋專助

